

コロナのストレス発散ほやき節 馴染まんわ「クラスター」「アラート」

近畿支部事務所長 和泉未喜男



7枚入り一袋を購入してきた日の夜は、心ウキウキ会話が弾み、うかつに口を滑らすと、「年取ってきて物分りが悪くなったのと違いますか。時代の流れに付いていないですよ」と、妻にたしなめられ、「何言うてんねん。俺の頭はまだ新鮮やで」と反論する。夫婦でこのような会話を交わした数か月前が忘れられません。

コロナ対策のニュースは連日続き、マスク騒ぎも一段落したところ、「今日は何人、感染が確認されているのかな。皆、危機感を持っているのかな」などという会話の中で、あまり馴染みのないカタカナの単語が出てくると、「それ、どういう意味？」と、口を滑らすことがあり、妻はその言葉尻を捉えて「時代に遅れている」と言うのです。私がどのような言葉に対して異

◀マスク姿で自宅と職場の往復のみ?の毎日過ごす和泉事務所長

論を唱えようとしているのかと言いますと、まず「クラスター」というカタカナ語です。もはや日常的に使われており、私も理解していますが、当初は聞き慣れない用語で、到底、集団感染というイメージがなく、危機感も生じなかったのは私だけではないと思います。

また、日本語の単語にくっつけた「アラート」というカタカナ語を聞いた時、「時計の目覚まし」か「童謡に出てくる鐘の音」を連想し、冗談交じりに言うのと、妻からまたたしなめられる始末でした。

日本では昔から外来語として、子どもから大人まで理解できる簡単な意味、身近な物として表現された多くのカタカナ語があり、更に、時代の流れと共に新しい多くのカタカナ語が生まれ、カタカナで表現した方が分かり易く適切な場合もあり、徐々に日常生活に、社会活動に馴染んでいったと思います。



ところが、感染症対策だけでなく台風の気象情報にも最近急に使われ始めたアラートという言葉は、人々に十分危機感を伝えることができたのだろうか。伝えたい内容が十分相手に伝わっているのだろうか、

と今も考えています。このようなことですから、妻から「年を取って頑固になり、なんでも拒絶しようとする。若いころから踏襲してきた頭の中身がアラート」と、落ちが付きました。それは「年を重ね、社会から後れを取るという意味のかな」と、反省はするけれど、私の考えに共感して頂ける人がいたなら、うれしい氣もします。ほやき節になりましたが、要は年齢を重ねても社会で生きていく限り、社会に溶け込み、社会からはみ出さないようにしなければならぬと、いうことでしょうか。きちんとマスクをして、自宅と職場の往復のみが今の私の「日常」ですが、心は遠く温泉地を駆け巡っています。

「出勤は、マスクをしてね、お父さん」と言われながら玄関を出ます。今年は、「新型コロナウイルス感染症」抜きでは語れない年となつてしまいました。すべてにコロナ対策が絡む「日常」が何か月も経過すると、なんとなく馴染んでくるものですが、行動を制約されると辛い面もあり、愚痴が多くなります。マスクを求めて毎朝5時頃から薬局の前に並び、出勤時間になると妻と交替して、やっこのことで

